

宮澤賢治が、最愛の妹トシを喪ったのは、大正十一年の初冬。賢治二十六歳、トシ二十四歳のときでした。

賢治は、父親である政次郎と、家業や仏教の信仰について異なる考えを持ち、たびたび対立する仲でした。そんな家族関係の中で、妹トシとはお互いを自然に理解できる間柄で、深い心のつながりがあったようです。

賢治はそんなトシを、結核で亡くしてしまいます。それはおそらく、半身が引き裂かれるような思いであったでしょう。

この別れについて、賢治は「永訣の朝」という詩に書いています。

「けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ

みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゆとてちてけんじや)」

トシは臨終の床で、賢治に「あめゆじゆとてちてけんじや・雨雪をとってきてください」と頼むのです。賢治は外に飛び出し、お椀に雪を入れて病室に持ち帰ろうとします。

「(あめゆじゆとてちてけんじや)」

トシの、雨雪をとってきてください、という声は、賢治の耳に繰り返し聞こえてきます。

そして、賢治はこう祈るのです。

「おまへが食べるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまころからいのる

どうかこれが天上のアイスクリームになつて

おまへとみんなとに聖い資糧をもたらずやうに

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」

この詩は、賢治の絶唱といってもいいでしょう。妹トシへの思い、永遠の別れに臨む慟哭、そして『法華経』を信仰する賢治の大乗仏教の精神が融合した世界が展開されています。

この他二編の詩をトシの死に際し書いた後、賢治は約半年の間、一つの詩も書いていません。それまで、ほんの数ヶ月の間に、大きなトランクいっぱいの原稿を書いていた賢治が、まったく言葉を発さなかったのです。

『禅のこころ-曹洞宗-』

トシと永遠に別れたのは冬のことでしたが、賢治の心も、さながら冬眠のごとく、じっと動かなくなってしまったのかもしれませんが。

六か月後、賢治は青森を経てからふと樺太へ旅をします。そこで、堰を切ったように言葉があふれ出します。冬眠からさめたかのように。

「あおもりばんか青森挽歌」「オホーツク挽歌」「噴火湾（ノクターン）」などの、一連の挽歌が詠われました。

その中で賢治は、トシを追い求め、追悼ついとし、トシの死とは何だったのかを、繰り返し繰り返し詠っています。一つの詩が三百行を超える長大な挽歌です。

これらの挽歌を詠うことで、賢治は徐々にトシの死を受け入れていったのでしょう。そのために、賢治の心には、きっと冬が必要だったのだと思います。

「小岩井農場」という詩に、賢治がたどりついたであろう心境が詠われています。

「もうけつしてさびしくはない
なんべんさびしくないと云つたところで
またさびしくなるのはきまつている
けれどもここはこれでいいのだ
すべてさびしさと悲傷ひしょう たとを焚いて
ひとは透明きどうな軌道をすすむ」

冬を乗り越えた賢治の心に訪れた、穏やかな春の思いではないでしょうか。

— 終 —